

第6回屋久島世界遺産地域科学委員会 ヤクシカワーキンググループ

ヤクシカの生息頭数が増加!!

2月21日、第6回ヤクシカWGが、熊本市において開催されました。最初に関係機関の取組報告があり、特記すべき事項として、新たなヤクシカの生息数調査により、以前の約1万6千頭から、1万8千頭以上に増加したという結果が報告されました。民有林、国有林を含めた有害鳥獣捕獲等により、平成24年度は、現時点までに3千6百頭以上の捕獲が行われるなど、最近では3千頭近くの捕獲が行われています。しかし、依然としてシカの生息数は減少しておらず、むしろ増加しているのではないかと結果が示されました。



第6回ヤクシカワーキンググループ

その他、様々出された意見の一部として、シカが移動している可能性の検証、全域で

捕るべきか、捕る箇所を絞るかの目標設定の問題、捕獲効率を上げる手法の検討、分業ができる事業体制づくりの課題等が挙げられました。また、西部地域の取り扱いについては、一部の研究者から科学委員会の認識と異なる提言が示されたことから、今後科学(学会)の見地から検討することとされました。今後、シカ密度の高い西部地域については、「守るエリア」、「捕るエリア」、「見守るエリア」に3区分する提案がありました。が、他遺産地域の扱いを踏まえると、見守るエリアとしての位置づけは要検討との意見もありました。

更に、西部地域の一部については、今後九州森林管理局から捕獲試験を実施することを提案し、目的、検証法等を詰めていくことで概ね賛同を得ました。

このほか、屋久島のシカ対策については、「シカの捕獲効果の評価とどういう状況を目標とするのか」、「順応的観点で捕獲手法の検討を行うなど、一歩でも進めることが重要であること」、「関係機関が行うシカ対策関係事業については、科学委員会委員へ



シンポジウム会場の様子

も情報共有すること」、「国有林内における有害鳥獣捕獲は、林野庁だけで行われており、関係機関全体が取り組む必要があること」、「関係機関の意思統一による全体計画の策定・検討を行う戦略を立て優先順位付けをすること」などが求められました。

九州森林環境シンポジウム
 2月20日、九州森林管理局の主催により、九州各地で広がるシカ被害対策について、「九州森林環境シンポジウム」がフードパル熊本にて開催されました。冒頭の局長挨拶では、限られた予算、陣容等の中では有効な対策を講じるため全体的戦略づくり、具体的戦術への取組が重要であることについて触れました。その後、3部構成として、第1部では各専門分野でのシカ対策の取組、出口対策としてシカ肉(ジビエ料理)や革製品としての利用の紹介等報告、第2

増えすぎたシカによる危機と捕獲・利活用を考える

も情報共有すること」、「国有林内における有害鳥獣捕獲は、林野庁だけで行われており、関係機関全体が取り組む必要があること」、「関係機関の意思統一による全体計画の策定・検討を行う戦略を立て優先順位付けをすること」などが求められました。

部ではジビエ試食会、第3部では、午前の報告者ほかによるパネルディスカッションが行われました。このうち、第1部の鈴木正嗣岐阜大教授の報告に少し触れると、現状の様々な課題を指摘し、今後のシカ対策を効果的に進めるためには、現行制度の限界(種々の捕獲制限、意識の違い、狩猟者の負担増)をクリアする必要性、専門的捕獲技術者集団の導入などが紹介され、従来の考え方、制度等を越えた対策が必要と強調されました。また、出口対策における食肉としての利用は、衛生面での対策が重要など示唆に富む内容が印象に残りました。



盛況となったジビエ料理試食会

屋久島の植物



ヤナギイチゴ (イラクサ科)

本州以南に分布する落葉低木。低地の林縁に見られる。葉は柄があつて互生し、幅約2cm、長さ10cmほどで先はとがり、裏は白っぽい。果実は密集し、橙色に熟して食べられるが、おいしくない。花期3〜4月
 果期5〜6月



西部の瀬切川周辺自生地の様子

屋久島に自生する希少種ヤクタネゴヨウ(絶滅危惧IB類)は、国割岳、破沙岳、高平岳周辺の3箇所に自生地があります。平成23〜24年度に基礎調査を行い、健全度は、中庸から健全、一部衰退も見られました。衰弱要因は、シカの角研ぎ、腐朽菌侵入、風衝の影響等が推定されました。今後、専門家意見も聞き、自生地の保護林化を検討することとしています。

ヤクタネゴヨウ自生地調査と保護林の検討

屋久島生態系モニタリング

屋久島西部地域における ヤクタネゴヨウ生育調査（平成21年度）

**ヤクタネゴヨウ群落調査③560mプロット

【プロットの状況】付近は花崗岩の大岩が露出する尾根の上で、岩上の乾燥する場所を中心にヤクタネゴヨウの大径木が数多く群落状に生育。またヤクタネゴヨウの古い切株があり、照葉樹の大径木が出現しないことから、照葉樹二次林的要素が高い。風通しがよく比較的乾燥するが、岩の合間における照葉樹の生育が旺盛で、照葉樹の落葉腐植層（リター層・腐葉土）が岩の下や間には厚く堆積。このプロットには、15本のヤクタネゴヨウ生立木（内7本がプロット外）、4本の幼齢木（全てプロット外）、5本の立枯木（内1本はプロット外）がある。

【5年前との経年変化】階層構造を見ると、高木層と亜高木層はほとんど変動が見られない。しかし低木層は、ヤクシカ摂食を比較的多く受けているタイミンタチバナの本数が減少し、優占種は前回のタイミンタチバナからサクラツツジに変化。草本層も、前回のタイミンタチバナから今回はシダ類のウラジロに変化。なお、このプロット及びその周辺においては、ヤクタネゴヨウの実生苗が10本、幼齢木が4本確認されている。これは、このプロットの林床が、比較的日当たりがよいことと関係している。林分構造（階層構造や林分の発達段階）全体を見ると、低木層に高木性樹種の稚樹が見当たらないこと以外は、特に目につく変化はなかった。なお、このプロットは、他のプロットと比較し、高木層や亜高木層の植生率が前回と同値であり、高木・亜高木層の照葉樹の樹冠の発達がそれほど顕著ではない。そのため、林床への光の到達がそこそこに見られ、ヤクタネゴヨウ実生苗の更新に影響を与えているものと考えられる。

屋久島の世界自然遺産地域については、同じページの中で、「世界遺産地域に関する九州森林管理局の取組」をリンクしてありますので、こちらから様々な情報を得られます。また、「屋久島の森林」の中では、今回特に「屋久島の動物」について、オリジナルの生態写真を多数掲載し、大きくバージョンアップさせました。一昨年に掲載した「屋久島の植

今般、屋久島森林環境保全センターのホームページ（HP）を、デザインや構成を変えて、新たに刷新しました。ページの冒頭に最近のトピックスを載せ、下段には、保全センターの様々な業務を紹介する「保全センターの紹介」と、屋久島の動植物や森林軌道の歴史などを紹介する「屋久島の森林」のコーナーを設置し、情報を提供しています。

屋久島森林環境保全センターのホームページをリニューアルしました！

物と併せて、屋久島の動植物関係については、ある程度概観をつかめるのではないのでしょうか。なお、登山コースとしてメジャーな屋久島の山々を紹介する、「屋久島の山」のコーナーについても近日公開予定です。さらに、「屋久島の森林生態系に影響を及ぼすヤクシカによる食害被害状況」に関するコーナーも新たに作成し、最近の研究成果、現地観察記録等を元に、解説と生態写真で紹介していきます。HPに掲載中の「ヤクシカ好き嫌い植物図鑑」と合わせて見ていただければ、ヤクシカの食性や生態について、ちよつと物知りになれるかもしれません。これからもHPの内容については、屋久島の自然、動植物、シカ問題など興味深い話題についてわかりやすく紹介し、情報提供を行っていきたく考えています。（なお、使用している写真の無断使用はしないでください。）

最終回！

屋久島の野鳥

《旅鳥のオアシス 屋久島》

「旅鳥」とは、繁殖地と越冬地を行き来する「渡り」の際、一時的に立ち寄るものをいい、屋久島を含む南西諸島では、こうした鳥たちが数多く飛来することで知られます。地球規模で起こる鳥たちの移動は海を越える必要があるため、海洋に点在する離島は、渡りの中継地（休息地）として非常に重要です。

屋久島でも春秋のピーク時には島中が旅鳥だらけになり、種数を比較すれば、年間を通して島内に生息する留鳥よりも旅鳥のほうが多くなります。訪れる旅鳥の種類は、気象条件等の様々な要因に左右されるため、毎年みられる鳥もいれば、その飛来自体が記録的になる鳥もいます。

今回は、近年屋久島で観察された様々な旅鳥を、ほんの少しですがご紹介します。



【訂正】：洋上アルプス210号（平成24年9月号）に掲載した「ズアカアオバト」の写真は、冬鳥として屋久島に渡来した別種「アオバト」でした（腹部がクリーム色をしており、撮影日も2月であることから）。ズアカアオバトについては、保全センターのホームページ内「屋久島の動物」のコーナーにて別途紹介しています。

 <p>アカツクシガモ 日本には毎年少数が渡来する美しいカモ。屋久島には数日間滞在した模様。</p>	 <p>ヤマヒバリ 数少ない旅鳥として、主に日本海側で記録されるが、南日本での記録は稀。</p>	 <p>ツバメチドリ 耕作地を訪れるが、じっとしていると、背景に溶け込んで見つけづらい。</p>	 <p>コジャクシギ シベリアとオセアニアを行き来する渡り鳥。草地などで、主に昆虫を捕食する。</p>	 <p>ハジロクロハラアジサシ クロハラアジサシとともに河川上空を飛び交う姿が見られた。写真は成鳥夏羽。</p>
 <p>セイタカシギ ピンク色の長い脚がよく目立つので、訪れてさえれば見つけやすい旅鳥。</p>	 <p>シマアジ 屋久島では、「縞鯨（島鯨）」のほうが有名だが、「縞味」と書くカモの仲間。</p>	 <p>ギンムクドリ ムクドリの仲間は、他にもホシムクドリやコムクドリなどが飛来し、群れも見られる。</p>	 <p>クロジョウビタキ 日本で観察されることは稀な珍鳥。近年、迷鳥として屋久島でも記録された。</p>	 <p>ヒシクイ 国指定の天然記念物。亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイの両方が飛来した。</p>